

◆水明インターネット句会◆ 令和七年十一月

(1)

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
小春日や頷くだけの父のみて 落葉追ふ風の行方を知らずして	大江戸線六本木駅冬の蝶	警官も板前もゐて夜学の灯	実柘榴は裂けて哀しや闇を噛む	帰り来る娘の笑みや白芙蓉	手締めする声をちこちに酉の市	潮溜まり細波立ちて初時雨	秋晴れや思ひの丈舞へ女宰相	ブルースの魂が棲む冬の滝	舌の根を蕩かし熟柿甘きこと	菜漬く夜の妻の話の埒も無し	人生の恥部を隠せる落葉かな	ワルキユーレ鴉が群れる枯れ櫻	大好きな父さんの肩流れ星	点滴に繋がれ挙る初日かな	目覚めれば厨に音なく初時雨	澄みわたり余白の増へし冬はじめ	木通の実熟れ切腹をしてをりし	バス停や立冬の風髪ゆらす	

◆水明インターねつト句会◆ 令和七年十一月

令和七年十一月

柿簾日の斑の中に猫の影

歩き食ふ肉まん熱し山眠る

小春日和や婆婆が車掌の繩電車

石段の一
段飛はし七五三

光芒の洩れて時雨の止みにけり

亥田ヤ案』に伊勢屋を引三一

一 言 終 三 拙 六 六 六

ヨリ二の不相火の反長、

憂國形安ザハ苦者循矣かぬ

女子鷹匠のマリツジリング運ぶ鷹

ふつと息吐き冬天の街をゆく

鼻赤く那須七湯はみぞれかな

愛とぎれ終電までの冬屋台

秋の夜思ひを風に 声遠し

裏庭の闇深々と虫時雨

晩鐘の長き余韻や枇杷の花

梵鐘のとよもす沖やいさざ舟
落とす葉を落として木立静かな

冬の日のなかへ釣り糸垂れてをり

◆水明インターネット句会◆ 令和七年十月

(3)

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	善男善女の列へぐつぐつ味噌おでん 紅葉狩茶店のひとに会ひたくて 神送とか神迎とかワンチャン 風に舞ふ龍飛の判官雲隠れ 冬晴れや蒼天に映えし六甲山 話の穂とどまり流る衣被 埋蔵金の赤城山麓からつ風 蓑虫や今朝も声かけ元氣かと 寝るための炬燄の城はピンク色 障子貼り任せうろう杞憂せり 終電の過ぎし踏切冬はじめ 名月やひとりぼっちを暴くよに 音も色も消し去る山の雪景色 蓑虫や南京錠の掛かる蔵 影踏んで止めてみました木の葉髪 湯の花の湯口に白し山眠る 築地松てふ風垣の有る旧家	老け顔の驚き耳に秋暮るる 幼子のもろ手かじかみ冬兆す 紅葉狩茶店のひとに会ひたくて 神送とか神迎とかワンチャン 風に舞ふ龍飛の判官雲隠れ 冬晴れや蒼天に映えし六甲山 話の穂とどまり流る衣被 埋蔵金の赤城山麓からつ風 蓑虫や今朝も声かけ元氣かと 寝るための炬燄の城はピンク色 障子貼り任せうろう杞憂せり 終電の過ぎし踏切冬はじめ 名月やひとりぼっちを暴くよに 音も色も消し去る山の雪景色 蓑虫や南京錠の掛かる蔵 影踏んで止めてみました木の葉髪 湯の花の湯口に白し山眠る 築地松てふ風垣の有る旧家				

◆水明インターねつト句会◆ 令和七年十一月

令和七年十一月

(4)

◆水明インターネット句会◆ 令和七年十一月

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61		
木通の実熟れ切腹をしておりし 夙の研ぎ澄ましたる月の影 鰯雲西へ西へと一万歩	思ひ出のあの日この日や帰り花 年の瀬や何時ものカフェに「イン・マイ・ライフ」	クルトンの潤けるスープ冬うらら メモ欄は句会二つや古曆	山眠る汽笛一声フェリー発つ 侘しらに門脇つはの花明り	洗い場の土の匂ひや新牛蒡 荏苒 ^{じんぜん} や句歴を聞かれ鳴の黙 ^{もだ}	綿飴の小春日和に透きとほる 冬林檎咲 ^{さく} へて孤独象の鼻	夜風鳴り雨戸をたたく木の実かな 秋桜や薄紅の風わたりをり	林泉の松に菰巻く冬構 ほろ酔ひのコートをひらり奴消へり	緋めだかの底に動かず水の秋 移築した古民家の梁すす払い	銀輪の風にもカサと散り紅葉												

◆水明インターねつト句会◆ 令和七年十一月

令和七年十一月

冬めくや作務衣忙しき庫裡の朝

頷いて聞いてやるだけ林檎剥く

どつと来る風のいたづら落葉搔

萩の木の強き剪定村小春

床やもらひし子猫ふところに

秋深し 一のる思ひに 扉かぬ力

黄落や旅行客にも市目に其

湯豆腐や二才出一得力の雨

六
卷之二十一

ジラノブニ黄田わづかこゑの用

、コウイー／＼云ふでボノハク吸血鬼

熊鍋の余中子熊ニミレク畫る

天高し引き綱たぐり山車を出す

立冬や一病増えしやりきれなさ

貰ひ柚子食べ買ひ柚子を浮かべけり

寒稽古息の凝りたる五稜郭

川刻む谷埋め尽くす紅葉かな
水縹の空と海抱き秋澄める

人攫ひ出さうな氣配虎落笛

(5)

◆水明インター ネット句会◆ 令和七年十一月

(6)

																	101	102	103	104
																	夕潮に静かに揺れる牡蠣筏	豚汁を多めに作る文化の日	毛皮着て甘味の汚れは茶色かな	奥能登に花野となりし千枚田